

コラム：学術コミュニケーション

ヨーロッパからの視点：国際的な変化の創生¹⁾ (David Prosser)²⁾

はじめに

学術コミュニケーションは長期間にわたる国際的な試みであり、直面する問題の範囲は国際的である。研究者がアクセスを必要とするものと図書館が購読できる（あるいは、増加しつつあるライセンスできる）ものとの情報ギャップから免れている国はない。同様に、それらの問題（特に「シリアルズ・クライシス」）についてのいかなる解決手段も国際的であることを求められるだろう。しかしながら、この国際的な環境の中では、地域による多様性がある。

全体としてヨーロッパは、研究への投資と出版論文の数の点では、合衆国と競争相手である。ヨーロッパは、最大規模の商業出版社の多く（Elsevier、Springer、Taylor & Francis など）と2つの最大規模の大学出版会（Oxford と Cambridge）の本拠地である。ヨーロッパが合衆国の競争相手にならない領域の一つは、学協会（及び関連する出版計画）の規模である。伝統的に、ヨーロッパの学会の大半は国内学会であり、汎ヨーロッパの学会はわずかであった。その結果、学会とその出版計画は合衆国のような規模を持っていない。しかしながら、総じて（雑誌のタイトル数と出版される論文数の点では）より小規模にも関わらず、ヨーロッパ、特に英国では、（学協会雑誌の最大規模の出版社である Blackwell と一体となった）強力な学協会出版の状況が見られる。

当然のことながら、ヨーロッパ全域の研究大学と図書館の両方について財源と組織の面で大きな違いがある。簡単な例では、英国の研究大学の大半は、中央[政府]から財源が提供されるが、一方、ヨーロッパ大陸では、とりわけ図書館の財源は個々の学部から拠出される（そして大学の多くは、強力な学部図書館をもち続けている）。

ヨーロッパ連合（EU）は、汎ヨーロッパ的な国家(political entity)であるにもかかわらず、基礎研究や図書館の設置のいずれについても、[影響を及ぼすほど]大きな支出能力を持ち合わせていない。これらについての決定は国レベルで行われ、それによってヨーロッパレベルでの学術コミュニケーションの課題に関する合意形成が困難になっている。幸いにも、[ものごと]前進する際に合意は必ずしも必要とは限らない。次の事例はこのことをうまく説明しているかもしれない。

英国の調査(The U.K. inquiry)

最初の事例は、英国下院（U.K. House of Commons）の科学技術委員会（Science Technology Committee）による科学出版物の調査である³⁾。委員会は、英国の研究助成団体を含む、多数の団体の支出と方針の検討に責任を有し、これらの団体に関して政府に勧告を行うことができる。

本調査は、「...特に価格と利用可能性に関連して、科学コミュニティにおける雑誌に対するアクセス」を調査し、そして「...研究者、教師および学生が仕事を効果的に遂行するために必要となる出版物へのアクセスを保証するために、政府、出版産業および学術機関がとるべき対策」を尋ねるために始められた。

委員会は、関心を持つ広範囲のグループから文書証拠(written evidence)を受理し、夏以降

の時点での報告のため、口頭による証言（oral evidence）を聞いている過程である。

SPARC Europe は、委員会が助成団体に対して3つの勧告を行うことを提案している。第一は、著者による論文の著作権の保持が助成の条件となるべきことである。研究論文における著者から出版社への著作権の委譲（あるいは、排他的で限られた使用許諾の譲渡）は、出版社が論文へのアクセスをコントロールすることになり、その後の論文利用を制限する。

第二は、最終の、査読済み論文のコピーが、適切で、全文が検索可能で、無料でアクセスできるインターネット・レポジトリあるいはアーカイブに保管されることを著者に要求すべきである。最後は、オープン・アクセス雑誌への出版料金が支払えるように研究助成金の一部としてその資金を提供すべきである。委員会の調査には国際的に強い関心が寄せられており、その報告書が他の諸国でも類似の行動を引き起こす触媒の働きをする（あるいは少なくとも他の諸国が勧告をとり上げる）ことを目の当たりにするのではなかろうか。

ベルリン宣言（Berlin Declaration）

第二の例は、学術コミュニケーションを取り巻く課題の中で、助成団体の関心を引くものである。昨年（2003年）10月に、ドイツの研究助成団体は、ベルリン宣言を発表した⁴⁾。助成団体は、「社会に対する情報が広範にまた直ちに利用できない場合、知識を配布する目的は半ばしか達成されない」ことに気が付いたので、（自己アーカイビングとオープン・アクセス雑誌の両方を通じた）オープン・アクセスの支援を行っている。これを実際に先導したのは、ドイツのマックス・プランク協会（Max Plank Gesellschaft）である。それによって、レポジトリが立ち上げられ、多数のオープン・アクセス雑誌が創刊された。現在、フランス、オーストリア、フィンランドおよびギリシアの助成団体を含む、ドイツ以外の組織がベルリン宣言に署名しつつある。

宣言と下院の調査によってドイツと英国以外で広範な議論が開始され、それらの効果が増強し、汎ヨーロッパ的な合意を待たなければならない場合よりも、[オープン・アクセスが]もっと迅速に前進することになるだろう。

ウェルカム財団（Wellcome Trust）の貢献

助成団体のリーダーシップを議論する場合に、オープン・アクセスの議論に果たしたウェルカム財団の意義深い貢献を記すことは重要である。ウェルカム財団は、「...人間および動物の健康の改善を目的とする研究を育成・促進するために」昨年（2003年）5億ポンドを研究（主として生物医学分野でかつ主に英国）に投資した。昨年、財団は、オープン・アクセスを強く支援する立場の声明を公表し、財団が助成した研究を報告する論文に「...研究者が結んでいる契約条件や出版社（商業、非営利、学術に関わらず）が採用するマーケティングと配布の戦略によって、入手可能性やアクセス可能性に不都合な影響が及ばないように保証することに基本的な関心がある...」と述べている。特に財団は、財団が支出した助成金をオープン・アクセス雑誌の出版料金（publication charge）の支払いに当てることに同意している⁵⁾。

オープン・アクセス戦略支援の成長

これらの高いレベルのイニシアティブは、2002年2月のブダペスト・オープン・アクセス・イニシアティブ(BOAI: Budapest Open Access Initiative)⁶⁾がまとめたオープン・アクセスを達成するための、2つの平行でかつ相補的な戦略に対して強力な支援を提供しつつある。BOAIは、著者による[機関]レポジトリへの自己アーカイビング(self-archiving)およびオープン・アクセス雑誌について簡潔な2組のアプローチを形成した。それは、読者と読者が関心を持つ論文の間にある購読障壁(subscription barriers)を取り払うことになるものであった。これらの2つの戦略を推進することによって、より公正で、より公平で、より効果的なコミュニケーション・システムへ移動することができる。ヨーロッパで取られつつある行動は、これらの両方の手段に基づいている。

機関が著者の(その他学術資料の中の)論文を受理するレポジトリの立ち上げを可能にする最初のソフトウェア・パッケージは、英国のサウザンプトンにあるeprint.org(現在はGNU EPrintsに名称変更)が提供した。現在、このオープン・ソース・ソフトウェアは、世界中の120を越えるアーカイブの立ち上げに使われつつある。他に開発されたソフトウェア・パッケージには、CERNのCDSwareおよびオランダのARNOがある⁷⁾。

いくつかのヨーロッパ諸国では、機関レポジトリの開発を奨励する、多数の大規模なプロジェクトが存在する。例えば、オランダのDAREプロジェクトは、基盤を提供し、機関レポジトリを支援することを目的としている。そして、それによって全てのオランダの大学が作業レポジトリ(working repository)を確保していることが印象的である。これは、比較的規模が小さな場合、国全体としての課題解決を行いやすくしている例である。SHERPAプロジェクトは、英国の研究中心大学の大半である20大学に類似の支援を行っている⁸⁾。

オープン・アクセス雑誌のディレクトリ(Directory of Open Access Journals)

オープン・アクセス雑誌に戻ると、2003年5月にルンド大学(Lund University)によるDirectory of Open Access Journal(DOAJ)の創刊を見た⁹⁾。このディレクトリは、完全な査読オープン・アクセス雑誌を含み、質の高い研究がオープン・アクセス[の形]で出版できることを示す、きわめて価値の高いサービスを提供している。開始当初、DOAJには375タイトルが含まれていたが、数値は、広範囲の主題領域(科学と人文・社会科学の両分野)にわたる775タイトル以上に即座に増えた。DOAJの特徴の一つは、図書館職員が収録されている各雑誌のレコードを簡単にダウンロードし、目録にそのレコードを追加し、読者がその雑誌について学習することができることである。

創刊誌が初めからオープン・アクセス[の雑誌]として「誕生し」、既存の購読ベースの雑誌がオープン・アクセスへの移行について検討していることを目の当たりにしている。最初のカテゴリーでは、BioMedCentralは、規模の点では先頭に立ち続けており、100以上の雑誌に5,000以上のオープン・アクセスの論文を出版している¹⁰⁾。第二のカテゴリーでは、[オープン・アクセスへの]移行を試みている出版社(特に学協会出版社)の数が増えている。

SPARC Europeが促進している一つのモデルは、著者が出版料金を支払うのか、あるいは、それができるのかについて選択する機会を提供するものである¹¹⁾。著者が同意した(そして、いうまでもなく、査読を経て論文の出版が受理された)場合、論文は、出版物でオープン・アクセスとなる。著者が支払いに同意しないか、支払うことができない場合は、論文は購

読者のみが利用可能である。長い間に、[出版料の]支払いに同意する著者が増えるべきであり、そうすれば出版社は、[雑誌の]購読価格の削減を始めることができる。結局、雑誌は完全にオープン・アクセスとなるのである。

雑誌所有者の財政上のリスクを取り除いていないにも関わらず、このモデルは、[雑誌の]出版収入に見合った購読収入の減少という円滑な移行時期を提供することで、雑誌所有者のリスクを減少させるべきである。英国では、既に、Oxford University Press、Company of BiologistsおよびSociety of Experimental Biologyがこのモデルに基づく実験を始めている¹²⁾。

学術コミュニケーションのように、極めて大きな慣性 (inertia) がぎっしりつまったシステムの根本的な変化は、非常に困難であろう。これらの難しさは、問題の性格が世界的であり、国際的であることと混じり合っ、合意[形成]と協力とを難しくしている。というものの、レポジトリへの著作の保管 (deposit)、オープン・アクセス雑誌への出版、これらの雑誌による同僚著作の読書のようなオープン・アクセスを受入れている研究者が増えている。

図書館職員は、オープン・アクセスの便益を理解しつつあり、[親]機関のレポジトリのホストとしての役割を果たすことが増えている。助成団体および政治家は、古い購読ベースの[雑誌]システムが効率的でないことに気が付き始めており、新しいモデルを厳しい目で見ている。このような、高いレベルと草の根[レベル]の変化の要求の組み合わせによってシステムの惰性および多様で、多文化の環境における作業の難しさを克服できるようになるであろう。

SPARC Europeは、ヨーロッパにおける変化の奨励と支援において役割を果たしうること、また、北米のSPARCの成功に続いていることを誇りに思っている。発足してから二年足らずであるが、SPARC Europeは、既に 14 のヨーロッパ諸国で 80 以上のメンバーを有している¹³⁾。団結することによって、メンバーは声を強めることができ、変化の創生 (create change) を助けているのだ¹⁴⁾。

(山形大学附属図書館 加藤信哉)

注

- 1) The view from Europe: Creating international change. C&RL News, May 2004. Vol.65, No.5
<http://www.ala.org/ala/acrl/acrlpubs/crlnews/backissues2004/may04/viewEurope.htm>
[accessed 2004-06-03]
- 2) Director, SPARC Europe, e-mail: david.prosser@bodley.ox.ac.uk
- 3) http://www.parliament.uk/parliamentary_committees/science_and_technology_committee/scitech111203a.cfm. 口頭による証言の速記は以下で見ることができる。
<http://www.publications.parliament.uk/pa/cm/cmsctech.htm>
- 4) <http://www.zim.mpg.de/openaccess-berlin/berlindeclaration.htm>.
- 5) <http://www.wellcome.ac.uk/en/1/awtvispolpub.html>
- 6) <http://www.soros.org/openaccess>
- 7) 多様な機関レポジトリのソフトウェアは以下で見ることができる。
GNU Eprints: <http://software.eprints.org/>、CDSWare: <http://cdsware.cern.ch/>、Arno:

- <http://www.uba.uva.nl.arno>
- 8) DARE: <http://www.surf.nl/en/themas/index2.php?old=7>、
SHERPA: <http://www.sherpa.ac.uk/>
- 9) <http://www.doaj.org>
[2004年6月現在で1,107タイトルが提供されている。また、収録されている雑誌276タイトルの論文検索と表示ができるようになった]
- 10) <http://www.biomedcentral.com>
- 11) David C. Prosser, "From Here to There: A Proposed Mechanism for Transforming Journals from Closed to Open Access," *Learned Publishing*, Vol.16 (2003), pp.163-66.
(以前のバージョンは <http://www.arl.org/sparc/core/index.asp?page=g29> から入手可能)
[原文は以下から入手可能:
<http://haly.ingentaselect.com/vl=12650831/cl=12/nw=1/rpsv/cgi-bin/linker?ini=alpsp&reqidx=/cw/alpsp/09531513/v16n3/s1/p163>]
- 12) Oxford University Press: <http://www3.oup.co.uk/nar/specila/14/default.html>、 Company of Biologist: <http://www.biologists.com/openaccess.html>、 Society of Experimental Biology (*Journal of Experimental Botany*): <http://www.jisc.ac.uk/index.cfm?name=news>)
- 13) <http://www.sparceurope.org/>、 <http://www.arl.org/sparc>
- 14) <http://www.arl.org/create/>
[日本語版は以下を参照:
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/projects/isc/sparc/create/home.html>]